

やまといとん

鶴見正夫 作
田中槇子 画



Mdai

やまんとん

鶴見正夫作 田中槇子画



現代童話館 5



やきとんとん

昭和50年4月20日 第1刷発行

作家 鶴見正夫 ©

画家 田中槇子 ©

発行所 株式会社 童心社

東京都新宿区三栄町22

電話 (357) 4181 (代表)

振替 東京75504

活版 新興印刷製本株式会社

平版 小宮山印刷株式会社

製本 文勇堂製本工業株式会社

＜作家＞

鶴見正夫（つるみ まさお）

1926年新潟県に生まれる。早稲田大学政治経済学部卒業。著書は詩集『日本海の詩』（理論社），『駅長とうさん』『最後のサムライ』『鮭のくる川』（以上国土社），『かくされたオランダ人』（金の星社），『長い冬の物語』（あかね書房），『ブルドーザのガンバ』（偕成社）のほか「あめふりくまのこ」など童謡が多数ある。

現住所 東京都杉並区松庵3-24-2

＜画家＞

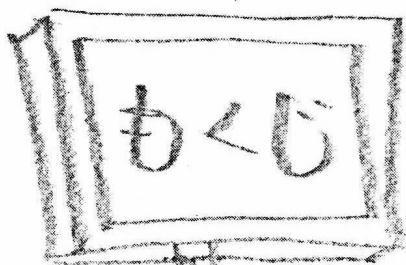
田中槇子（たなか まきこ）

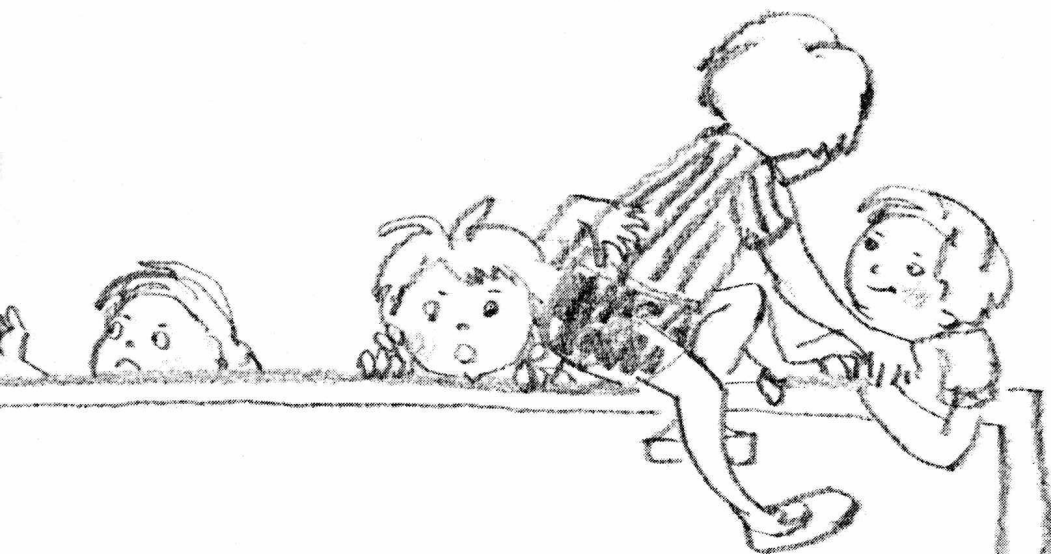
1942年東京に生まれる。武蔵野美術大学商業デザイン科卒業。絵本『ノアのはこぶね』（聖パウロ女子修道院出版部），さし絵に『鮭のくる川』（国土社），『先生のけっこんしき』（ポプラ社）など多くの仕事がある。

現住所 東京都東久留米市学園町1-14-34

NDC913/©1975/118p/210cm

8393 240105-5253 Printed in Japan





4

なぜ宿題^{しゅくだい}ができるか？

40

3

トン小屋^{こや}いき

26

2

ニンニクさわぎ

14

1

あたまにとん

7





10
星^{ほし}ひとつ

9
さよならアッコ

8
ふしぎなこと

7
レンコンの話

6
シマさんの話

5
ぼくのたんけん

110

102

94

76

64

52





そう丁・さしえ
田中 榎子

おめでとう



1 あたまに とん

あたまに、へとんゝのつくことばは、なんだろう。あたまをひねって、考えた。

とんま とんち とんちんかん

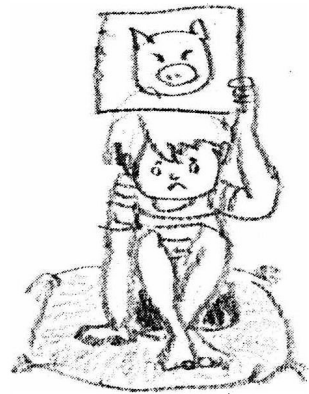
とん屋 とんちゃく とんだヤロウ

えーと、それからなんだろう。ぼくは、くるしまぎれに、でんぐりがえしをした。そしたら、

とんび とんぼ とんぼがえり

が、とんとんびようし（あつ、これはふたつもついている）に、とびだした。だけど、もっと、すてきなことばはないかなあ……。

おばあちゃんなら、いろんなことばを知っているかもしれない。そう思って、た



あたまに とん

ずねてみた。

「なにか、思いだしてよ。」

「さあて、ほかに、なにがあるだらね。」

おばあちゃんは、ぞうきんをぬっていた手をとめ、はなからずりおちそうなめがねをひよいとあげて、しらがあたまを、よこにかしげた。どんなにいそがしいときでも、ぼくのこととなると、すぐに相談そうだんにのってくれる。

おばあちゃんは、しばらくあたまをかしげていたが、

「そうそう、こんなことばもあるよ。」

と、目をほそめた。

「どんなことば？ はやくおしえて。」

「とんそう……それから、とんじ。」

「それ、なんのこと？」

「とんそうっていうのはね、にげて走ること。ついでに、漢字かんじもおしえてあげるよ。」

ぼくは、えんぴつと、新聞しんぶんにはさまれていた広告紙こうこくがみをもってきた。おばあちゃん



は、うらの白いところに、『遁走』と、大きく書いた。

「むずかしい字だね。それに、にげるなんて、意味もあまりよくないなあ。と同じっていうのは？」

「ばかなむすこのこと。」

「ちえっ。」

こんどこそ、すてきなことを期待していたぼくは、がっかりした。

「したうちは、いけません。」

おばあちゃんは、ぼくをたしなめた。いいおばあちゃんだけど、ときどきこういうふうにいるさいのが、タマニキズだ。

ぼくが、がっかりしているのに、おばあちゃんは、知らん顔でつづけた。

「漢字は、こうよ。」

と、『遁走』のそばに、もっと大きく、『豚児』と書いた。

「豚はブタ、児は子ども。ブタの子って書くの、うふふ……。」

おばあちゃんは、おかしそうにわらった。目がねが、また、ひくいはなをずりおちてきた。

ぼくは、わらうどころじゃなかった。こんどは、がっくりだった。

「おばあちゃんになんか、聞かなきゃよかった。」

ぶんとして、たたみのうえに、大の字になって、てんじょうをにらみつけた。

「どうかしたの？」

「だって……ブタの子なんて……。」

「え？……あ、あつ、そうか。」

おばあちゃんは、どうしてぼくがぶんとしたのか、やっと気がついたらしい。ほんとに、血のめぐりがわるいよ。

「だけどさ。」

と、こんどは、ぼくにいいわけでもするように、めがねに手をやりながら、話した。

「とんじっていうことばはね、おとうさんやおかあさんが、自分じぶんの子をひとに話すときに、わざと、えんりょをしてつかうことばよ。『うちのいい子が』とか、『すてきな子が』なんていったら、おかしいでしょ。」

なるほど、そうか。でも、ぼくはすこしも、心がはればれとしない。

「それはそうでも、ブタの子だって、ばかじゃないよ。そのしょうこに、ばかの漢字は、馬と鹿だろう。」

そういつて、ぱっとおきあがった。おばあちゃんは、とんだことをいつてしまったとばかり、せなかをまるめて、また、ぞうきんをぬいはじめた。

ぼくは気分なおしに、アパートの階段を、とんとんとかけおりて、そとに出た。

夕方であつた。買い物からかえってきた、となりのおばさんに出あつた。

「おかえんなさーい。」

びよこんとあたまをさげたついでに、かごを見たら、肉屋さんのつつみ紙が目についた。

ブタ肉かな。まったく、ついてないなあ。

「マンガの立ちよみでも、してこよっと。」

ぼくは、本屋さんのほうへ歩きだした。

そのとき、目のまえの四つかどを、おなじ四年一組の金山勉が、自転車にのってさっそうと、よこぎつていくのが見えた。まっすぐまえを見ていたから、ぼくには

気がつかない。

「おーい、勉強ーん！」

いつもなら、四つかどまでかけていって、大声でよぶのだが、どっこい、そうはいかなかった。

（あいつ、きょうも塾^{じゅく}へいくんだな。いい気なもんさ。）

ぼくは、口のなかでぶつぶついいながら、四つかどをとりこした。なぜって、もともと、ことのはじまりは、あいつのせいなんだ。

「あたまに、へとん」のつく、すてきなことばはないかなあ。」

ぼくが、そんなことを考えたのには、わけがあった。

その日、学校で、ぼくは、あだ名をつけられてしまった。そのあだ名は、『とんさく』……。まっさきにいいだしたのは、勉強だった。

2 ニンニクさわぎ

木曜日、三時間め。国語の授業中……。

ぼくらの組のうけもち、橋田先生である。きょ年ケツコンしたばかりの、わかい男の先生で、国語はいちばんとくいな科目ときている。あたらしいところをおしえるときには、いつもきまって、

「まず、わたしが教科書をよんでみましょう。」

そういつてはじめる。

先生は、教室のなかを、ゆっくりと歩きまわりながら、大きな声でよむ。大学生のころ、コーラス部にはいつていたとかで、その声のきれいなこと、ちょうしのなめらかなこと。ぼくたちは、教科書を見ているのをわすれるほど、つい、うっとり

